

SNS を活用した有志によるオンラインディスカッションの可能性
ー遠隔からの学会参加時の逐語録を考察するー
Possibility of the Online Discussion by Volunteers Using SNS

鈴木真保*¹ 西村由弥子*² 澤山芳枝*² 小池啓子*² 立和名房子*² 合田美子*^{1,2}

Maho SUZUKI, Yumiko NISHIMURA, Yoshie SAWAYAMA, Keiko KOIKE, Fusako TACHIWANA, Yoshiko GODA
熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻*¹ 熊本大学教授システム学研究センター*²
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University

<あらまし>

コロナウィルス感染防止の措置として、学会、研究会、勉強会等がオンライン開催に代替されている。オンライン開催のイベント等には、参加者が自宅から参加できる利便性がある一方で、電子媒体を用いた個人参加となるため、他者との交流の中で生まれる新たな知見の獲得や活動のきっかけを得にくい。2020年2月末に長野で開催予定だった日本教育工学会（以下、JSET）春季全国大会もオンライン開催となり、この大会に参加予定であった有志5名は、SNSでディスカッションしながらの参加を試みた。その結果、SNSを活用することで新たな知見の獲得、疑問の解決、知見や気持ちを各自の職務へ転移する構想を語り合う現象が起こった。オンライン開催のイベント等への参加形態として複数名でのSNSディスカッションの経過を検証し、その可能性を考察し報告する。

<キーワード>オンライン, コミュニケーション, SNS, グループディスカッション

1. 背景

2020年の初め頃からコロナウィルス感染拡大防止対策として、学会・勉強会等対面で行われる学びの機会が次々と中止・オンライン開催へと切り替えられた。筆者らは、対面の学びの場では可能になる深い議論やそれに伴う没入感が失われ、学びの深化に不足を感じていた。

2020年2月29日から3月1日にかけて開催された日本教育工学会（以下、JSET）春季全国大会は、オンライン会議システムZoomを用いて試行された。これを受け、パブリックビューイングのように仲間とともに視聴することで議論の深まりや、学会参加に対する集中力の高まりが期待でき、学びが活性化するのではないかと考えた。

パブリックビューイングとは、自宅外等で他者とイベント等のテレビ番組を集団視聴する行為を指す。西尾（2011）は、通常のテレビ視聴の特徴を一方向コミュニケーションであるとし、パブリックビューイング時のパブリックビューイング空間内での双方向性・主体的な相互作用に注目した。

筆者らの多くは、博士前期課程を修了したばかりで研究者歴が浅い。学会というプロフェッショナルコミュニティと新参者である大学院生との関係は、パブリックビューイングでテレビとテレビの前に群がる一般視聴者と類似の関係にあるのではないかと考えた。今回の場合は、パブ

リックビューイングと同様の機能をもつ装置として、不均衡な力関係の中で、主体性をもったコミュニケーションの場になり得るのではないか。このように考え、SNSを利用し、大会と並行する形でオンラインディスカッションを試行した。その結果、筆者らは学びの深まりを感じ、本形態のコミュニケーションは他の場面においても適用し得るのではないかと感じた。このバーチャルなコミュニケーションの場を学習コミュニティとして成立させるための要素を明らかにして、再現性があるものを実装したいと考えた。

2. 目的

有志で実施したオンラインディスカッションのログを分析し、SNSの学習の場としての活用可能性について考察する。

3. 方法

3.1 実施方法

オンラインディスカッションは2020年2月29日から3月1日のJSET春季全国大会期間中に、実施。SNSとしてFacebook Messengerのグループスレッドを利用した。参加者は、日頃より交流のある研究者歴の浅い学会員5名。

3.2 分析方法

自宅から各自がアクセスしたグループチャットの内容を分析する。Facebook Messengerに残されたオンラインディスカッションの内容をテ

キストファイルとして出力、MAXQDA で分析した。筆者のひとりがコーダーとしてカテゴリー化を行い、その分類について筆者らがレビューする形で傾向を確認した。

4. テキスト分析結果

時間を3つの時点で区切り、確認した。大会開会から懇親会前の1日目、1日目の夕刻に行われた懇親会、2日目の3つである。なお、本大会の2日目は午前中からの開催であったが、SNSでは午後のみディスカッションが行われた。

	期 間
1日目	2020/02/29 08:36 - 2020/02/29 17:56
懇親会	2020/02/29 17:58 - 2020/03/01 01:03
2日目	2020/03/01 13:53 - 2020/03/01 16:38

1日目は開始状況など、学会の状況を記述するようなものが多く見られた。また、「はい、今、N301 みています」というように、単純に参加者自身の状況を記述するものも多い。状況を伝達・説明しようとするコミュニケーションといえる。そのほかには、登壇者へのねぎらい、ネット用語の砕けた表現を用いるなど場の雰囲気作りを行おうとする会話が散見される。コミュニティでの意思疎通を図ろうとしていることが推測できる。

懇親会の時間帯に「ツール等技術的説明」に関する発言が見られた。Facebook Messenger のビデオ通話を初めて導入したゆえ、接続に関する問題解決のためのコミュニケーションが繰り返されていたことによる。オンラインでのディスカッションの成立には、メディアの選択や使用方法の事前周知も重要な要素になると考える。

学会の進捗状況を説明する発言は、時間と共に減る。2日目は学会内容に対する感想や関連するアカデミックトピックに関する発言が増えている。「わたし、教師教育したいんですね」というように、発表内容に関連して、参加者が自らの職業的出自を語るといった自分の内面（気持ち）の発露をきっかけとして、他の参加者が自分の経験やアイデアを話し出すという場面もあった。参加者らの研究における共通課題に関するディスカッション内容も見られた。学会を集団視聴する過程で参加者それぞれが学んだ内容を共有し深めていると推測できる。

5. まとめ

今回のオンラインディスカッションは仲間内で半ば自然発生的に始まったが、最終的にはオンライン学会参加で得られた学びを共有するこ

とを通して、気付きを各自の職務へ転移し、今後の構想を語り合うまでに至った。コミュニケーションを成立させようとする試行錯誤、場の雰囲気作りから始まり、懇親会を経て徐々に発表内容に関する発言が増え、自らの経験も絡めて発言するなどコミュニティに対して貢献しようとする情報提供が増えていった。パブリックビューイングは双方向性・主体的な相互作用を特徴とするが、集団学習による効果を期待できるとは限らない。学習の場として応用するには学習目的が必要となる。我々の試行では学習目的はないものの、共通のフィールド・課題を有することから学習と類似する試行が生まれたともいえる。

そこで、ディスカッションから解を得る際に活用できる GARRISON ら（2000）のフレームワーク Community of Inquiry（以下、COI）と対比してみる。コミュニティの確立を通して共通の話題を深める、すなわち、Social Presence を高めるプロセスから Cognitive Presence 確立のプロセスへという流れは、COI に当てはまるといえるが、Teaching Presence には欠けている。日頃から共通の課題をディスカッションする仲間内での試行であり、学習目標がなくとも共通の視点でディスカッションができていたが、それは対象者の特性である可能性があり、限界点といえる。

5. 今後の方向性

今回、SNS 上でのコミュニケーションの傾向から導き出した可能性を提示したにすぎない。大学院生ら若い学び手の学びを支援するコミュニケーション装置の実装を目指したい。そのために、同様のオンラインディスカッションを実施し、学びを促す要素の同定と一般化のための実験を進めたい。

【参考文献】

- GARRISON, D. R., ANDERSON, T., & ARCHER, W. (2000) Critical inquiry in a text-based environment: Computer conferencing in higher education model. *The Internet and Higher Education*, 2(2-3):87-105
- 西尾祥子（2011）パブリックビューイングにおけるパブリック性とはなにか、情報文化学会誌, 18(1):28-33